

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381131

研究課題名(和文)ニューカマー青少年の学び直しを支える教育環境設計に関する研究

研究課題名(英文)A study of educational environment for newcomer young people

研究代表者

児島 明(KOJIMA, Akira)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：90366956

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、異文化間移動の過程で学びの継続が困難になりがちなニューカマー青少年の進路形成上の課題およびそれを克服するための諸条件について、主として学び直しの過程に注目しながら解明することをめざした。学歴や就労経験の異なる日系ブラジル人青年へのライフストーリー・インタビューを通じて以下の二点が明らかになった。第一に、早期の離学経験を有する者が学び直しに向かう契機は、離学の経緯や離学後の生活状況を反映して多様であること。第二に、学び直しの過程は、過去の喪失経験を自らの将来に資するものとして位置づけ直す作業をとまなうこと。これは、キャリア形成における自らを語る場の必要性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to make clear the problems which newcomer adolescents living among multiple cultures encounter in the process of their career development and to search for the a key to the solution. The following two points became clear through life story interviews with Japanese Brazilian young people whose educational and occupational experiences are different respectively. First, how those who left school at their early age start to relearn is diverse according to the experiences they had after leaving school. Second, starting to relearn is accompanied by reinterpreting their experiences of loss in the past as resources for the future. It suggests a necessity of the space where newcomer adolescents can talk about their prospects for the future freely.

研究分野：教育社会学

キーワード：多文化教育 ニューカマー 学び直し

1. 研究開始当初の背景

21世紀以降、「ニューカマーと教育」をめぐる研究は、学校でのニューカマーの子どもたちが直面する諸問題を解明する作業に熱心に取り組んできた。その結果、学校への適応を中心に対処すべき諸課題が明らかにされると同時に(太田 2000、志水・清水編 2001、小内編 2003、児島 2006、清水 2006)、学校内部の権力関係を組み替えていくような実践も生まれつつある(清水・児島編 2006)。この点からすれば、これまでに取り組まれてきた研究が一定の成果をあげてきたことはいうまでもない。

学校内部の課題がさまざまに論じられる一方で注目を浴びたのが、ニューカマーの子どもへの不就学に関する問題である(宮島・太田編 2005、佐久間 2006)。外国人の高校進学率についての全国的なデータは存在しないが、浜松NPOネットワークセンターが報告するところによれば、全国17都府県で公立高校の「外国人特別枠」が設定されているものの、50%未満と推定されている。この数字を一瞥しただけでも、少なからぬ子どもたちが義務教育段階で、あるいは義務教育修了後に学校を離脱していることは明白である。しかしながら、学校を離脱して以降のニューカマー青少年の実態については、児島(2008)による在日ブラジル人青年を対象とした事例分析があるが、いまだ十分に解明されていないのが現状である。

他方、「ニューカマーと教育」に関する研究の対象領域を学校内部から外部へと拡大したのが、ニューカマー青少年に関する移行課題を解明しようとする研究であり、申請者の過去のプロジェクトはこの文脈に位置づくものであった。たとえば児島(2010)及び児島(2011)では、日本とブラジルの間を行き来しながら青年期を過ごすブラジル人青年の生活史分析をもとに、国境を越える移動と以降をめぐる諸課題との相互連関について考察している。前者は日本での学校経験(日本の公立学校かブラジル人学校のいずれか)が帰国後の進路形成にどのように結びついているかを主題とし、後者はデカセギで来日したブラジル人青年の帰国後のキャリア形成を主題としている。

いずれもさらなる展開を必要とするテーマではあるが、その際、従来の研究が見過ぎてきた重要な問題があることを指摘せざるをえない。端的に言えば、「学び直し」の可能性をめぐる視点の欠如ということである。学校からの離脱は単純労働の世界への参入とほぼ同一視され、不平等な社会構造が再生産されることへの危惧が示されてきた。たしかに、十分な学歴をもたぬままに単純労働の世界に足を踏み入れた者が、その世界から抜け出すのは容易なことではない。とはいえ、彼らがそのような境遇にただ打ちひしがれているだけの存在ではないこともまた事実である。

過去の調査を通じて、働きながら学び、必要な学歴を取得することで、不利な状況の打破を試みる在日ブラジル人青年に何度か出会った。そして、そのような「学び直し」を支える教育環境(ブラジルの学歴の取得を目的とする通信教育など)が在日ブラジル人コミュニティに形成されつつあり、その利用者も年々増加傾向にあるという話も聞いた。しかし、そうした「学び直し」の実態についてのまとまった調査報告は管見の限り見あらず、不就学と単純労働のはざままで悩みながらも、なんとか道を切り開こうとする青年の姿は依然として見えないままである。こうした現状を背景に、彼らの移行過程に対する支援の必要性についても十分な理解が得られているとは言えない。

2. 研究の目的

上述したとおり、ニューカマー青少年に対する移行支援を構想する際に、不就学とキャリア形成をいかに架橋するかはきわめて重要な問題である。そこで本研究では、そうした「架橋」の現状と課題について、とくに滞日経験のあるブラジル人青年に焦点を合わせ、当事者による「学び直し」の実践とその効果への注目を通じて明らかにし、実効的な移行支援の可能性を探ることを目的とした。具体的には、とくに以下の二つの課題の解明を目的として調査研究を進めてきた。

(1)在日ブラジル人青年の「学び直し」を支える教育環境を多角的に解明すること。在日ブラジル人青年の学びに関わる教育機関としては、日本の公立学校とブラジル人学校に注目が集まりがちである。しかし、学校を離脱したり、早くから就労生活を送る青年の学びの実態を把握するには、学校に注目するだけでは不十分であり、塾、家庭教師、英会話スクール、通信教育などの学校外教育を利用した学びにも目を配る必要がある。とりわけ、在日ブラジル人コミュニティで発展しつつある中等教育や高等教育の修了資格取得のための通信教育システムは、日本で働く多くのブラジル人青年を引きつけつつある。そうしたシステムの構造や特質を具体的に明らかにする必要がある。

(2)「学び直し」の意義と効果について当事者の視点から包括的に理解すること。「学び直し」は在日ブラジル人青年の来日後の生活状況との密接な関連のなかで生じる営為であるため、「学び直し」にいたる経緯及び「学び直し」の経験そのものに関する丁寧な把握が不可欠となる。また、その結果、何らかの資格を取得することが、帰国後も含めたキャリア形成にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることも重要である。

「学び直し」の現場は、在日ブラジル人青年の軌道修正を可能にする場であると同時に、日本社会がブラジル人青少年に提供してきた教育環境の歪みを映し出す鏡でもある。また、日本では人生経歴の直線的・一方向的

な進行が前提とされがちであるが、個人化とグローバル化が平行して進行する現代社会においては、もはやそうした前提にそぐわない生き方がむしろ常態化しつつある。

こうした状況に鑑みれば、人びとの多様な生き方に対応できるものへと日本の教育システムを組み替えていくことの必要性について考えざるをえず、在日ブラジル人青年による「学び直し」の実践及びそれを支えるべく創出されつつある在日ブラジル人コミュニティの教育環境に学ぶところは多い。それを解明することは、在日ブラジル人をはじめとするニューカマー青年に対する実効的な移行支援を構想する際の基礎資料を提供するのみならず、移行過程の多元化を余儀なくされた現代社会において、諸個人の多様な生き方を支える教育環境がいかに設計可能かを考えるうえでも重要な意味をもつ。

3. 研究の方法

上記(1)の課題については、在日ブラジル人を対象に情報を発信している新聞、情報誌、ウェブサイトなどから幅広く情報を収集し、「学び直し」の機会を提供している諸機関の網羅的な把握に努めた他、中等教育修了資格の取得をめざす若者を対象とした通信教育を実施する名古屋市のブラジル人学校A校のスクーリングの現場に定期的に出向き、参与観察の手法を用いて「学び直し」の現状についての理解を深めた。

(2)の課題については、当事者の人生経歴について包括的に把握する必要があることから、以下の三つのグループのブラジル人青年に対してライフストーリー・インタビューを実施した。第一は上記A校の通信教育コースに通い中卒ないし高卒資格の取得をめざす14名、第二は日本で学校に通った経験(通信教育コース受講を含む)をもち現在はブラジルで生活する6名、第三は日本の公立学校に通った経験(通信教育コース受講は含まず)をもち現在は日本で生活する12名である。いずれのグループについても、調査協力者は機縁法的に増やしていった。とりわけ第二のグループに関しては、A校関係者から通信教育修了後に帰国した受講者を紹介してもらったほか、ライフストーリー・インタビューへの協力者に、帰国した知人を紹介してもらったなどして増やしていった。

4. 研究成果

(1)本研究ではまず、早期に学校を離脱して労働の世界に参入した在日ブラジル人青年が学び直しに向かうプロセスを、中卒・高卒資格の取得が可能な通信教育を受講する14名の青年の生活史にもとづいて理解しようと努めた。

まず、離学を生じさせる理由として、就労の選択、学校生活や学校環境、予期せぬ出来事という三つの要因が浮上した。就労の選択の目的は、家計補助と自らの願望

の実現に大別できた。家計補助が必要となる背景に目を向けると、家業の経営不振など通常デカセギの動機として語られるもののほか、親の借金返済や母親がシングルマザーであるがゆえの生活難など、より切迫した状況が浮かびあがった。学校生活や学校環境との関連で離学が生じる際の主要な要因は、日本の学校との関連では学業不振といじめであった。他方、ブラジル人学校との関連では学校閉鎖が離学を引き起こしていた。予期せぬ出来事としては、両親の求職行動にともなう転居をきっかけに離学を余儀なくされるといった例が挙げられる。

では、さまざまな理由から一度は学校を離脱した在日ブラジル人青年たちが、ふたたび学びの場に戻ってきたのはなぜなのだろうか。かれらが学び直しにいたる契機については、工場労働への不満、学びへの触発、学業の継続、帰国後の基礎づくりという四つの契機を抽出することができた。

工場労働への不満が自らのキャリア形成に主体的にかかわる構えを形成する場合、学び直しへの取り組みも自律的になされていた。学びへの触発は、学びの意義・効用・希望について語り、背中を押してくれる他者との出会いが学び直しの契機となったケースである。学業の継続には、不本意な離学へのくやしきから学業への復帰を切望していたケースとつぎの学業段階へのより有効な橋渡しとなる学びの場を模索していたケースが含まれる。いずれにしても、学業継続への意志を就労生活のなかでも維持しており、A校通信教育コースとの出会いはその希望をかなえるものであった。帰国後の基礎づくりは、帰国に備えてポルトガル語での学びを選択したケースであった。

学び直しに向かう契機は、離学の経緯や離学後の生活状況のさまざまなありようを反映して多様である一方で、複数の事例から共通して浮かびあがるのは、学び直しのプロセスを理解することは、かれらが自らの過去や現在をどのように語り直し、自らの将来にいかに関わりようとしているかを理解することと相即不離の関係にあるということである。今回の調査で浮かびあがった語り直しをその内容に即して分類すると、以下の二つに大別できた。

一つ目は日本で働くことについての語り直しである。日本で学び直しに着手することは、日本がかれらにとって帰国後のキャリア形成のための資金稼ぎの場から、キャリア形成の現場になることを意味していた。二つ目は同世代と異なる経験をしたことについての語り直しである。学び直しへの取り組みは、自らの軌跡について少し距離をおいて眺め、意味づけ直すよい契機となっていた。かつては資源の獲得を妨げてきた要因として語られた「つらい」過去は、現在、かれらが獲得しえた自負する視野の広さ、寛大さ、豊かな人間関係などの形成要因として新た

に意味づけられ、今後を生きていくための拠り所として資源化されていた。

(2)次に目的としたのは、ニューカマーの子どもたちの学びの継続を支えたり、逆に阻害したりする学校という場の特性を解明することであった。具体的には、小学校から高校まで日本の公立学校に通い、現在はブラジルで生活する6名のブラジル人青年を対象に学校経験および離学後の経緯についてライフストーリー・インタビューを行い、それぞれの学校段階で差異をめぐるとどのような問題に直面し、いかなる対処を試みたかを、そこで生じる具体的な相互行為に着目しながら理解しようと試みた。

ここではブラジル出身で小学校以降の教育を日本で受けた経験をもつアナさん(仮名)のライフヒストリーをとりあげる。アナさんは現在、サンパウロ市の日系学校に日本語教師として働きながら暮らしているが、小学校から高校まで日本の公立学校で学び、その後、専門学校への進学を経て日本の企業で働いた経験を有する。

まず、小学校生活においてアナさんが直面したのは、「日本人」に対する「外国人」として彼女を貶めようとする周囲の児童の攻撃だった。このことによってアナさんは自らを「負の差異」を有する存在として認識するようになり、不登校に近い状態に陥ってしまった。しかし、小3から担任になった教師の教育実践は、アナさんが自らの能力を正当に評価してもらえていると感じられるものであったため、自己肯定感の獲得を可能にした。ここで教師がおこなったのは文化的差異をとりたてて強調することではなく、むしろ個人的差異を称揚することであった。だが、アナさん自身は、そのように個人的差異が称揚される経験を契機として、自らの文化的差異に対する肯定感を取り戻していた。これをふまえて本稿では、個人的差異と文化的差異の関係を対立的にとらえたうえで「あれかこれか」を論じることはかならずしも子どもが生きる現実に即していないことを指摘し、個人的差異の承認が文化的差異の承認につながる回路の可能性などにも目を向けることの必要性について論じた。

他方、中学校生活についての描写からは、小学校で獲得しえた個人的差異と文化的差異をめぐると肯定感がふたたび不安定化する現状があきらかにされた。それは、学校的差異とも呼ぶべき差異をめぐるとの二つの側面が、中学校にあがるやいなや前面にせり出してきたことによるものであった。一つは、身なり指導などを通して外見上の差異を否定することで共同性を確保しようとする「差異の管理」である。そしてもう一つは、そのような共同性の安定化に貢献するような序列関係を強調する差異のコード、すなわち「管理のための差異」の浸透である。学校的差異の支配によって個人的差異も文化的差異も封

じこめられ、「息苦しさ」に押しつぶされそうなアナさんを支えたのは、親戚関係を基盤に形成されたエスニックな共同性の存在であった。エスニックな共同性はアナさんが文化的差異に対する肯定感を維持するための足場となると同時に、学校的差異が支配する学校文化を相対化する視点を提供することで、「息苦しさ」のなかを生き抜く拠り所となっていた。

そのように文化的差異が学校文化への抵抗の文脈にのみ固定される状況も含め、中学校生活を終始支配していた「息苦しさ」からの脱出を賭けておこなわれたのが高校選択であった。高校では、外国人や「ハーフ」の生徒は例外的な存在ではなかったことにくわえ、折からの「ハーフ・ブーム」で外見的なちがいがいへの積極的な意味付与がなされるなど、文化的差異は学校環境を構成する一部となったため、中学校とは比較にならぬほどの「生きやすさ」をもたらした。「みんなとちがってよかった瞬間がやっと訪れた」というアナさんのことばからは、文化的差異が受容される環境においてはじめて個人的差異をのびやかに生きることが可能になることがわかる。

さて、以上のように差異をめぐるとアナさんの学校経験を振り返ってみて、際立つのはやはり中学校における「息苦しさ」である。中学校ではなによりも学校的差異が優先され、個人的差異は学校の共同性を攪乱する要因として統制の対象とされた。そのため、個人的差異の称揚を文化的差異に対する肯定感につなげるという小学校ではありえた回路もほぼ断たれてしまった。このことは、概して文化的差異の承認に対するハードルの高い日本の学校において、文化的差異への肯定感を感じられる契機がほとんど失われてしまうことを意味している。アナさんの中学校生活における「息苦しさ」はこのように、文化的差異に対する肯定感の形成につながる回路がほとんど閉ざされる状況のもとで生みだされたといえるだろう。学校外に拠り所とできるエスニックな共同性が存在しなければ、アナさんとして学校を離脱していた可能性は十分にありうるのである。

このように学校段階間の移行という観点をとりいれることで、学びの継続性について「場」の特性をふまえたより動的な把握が可能になることが明らかになった。

(3)さらに、学びの継続性について困難を抱えてきたブラジル人青年がそれをいかに克服し、職業意識を形成していくのかについて、日本の公立学校に通った経験を有する12名のブラジル人青年(いずれも女性で、年齢は21~31歳)へのライフストーリー・インタビューの結果をもとに検討した。

調査協力者においては、成長の過程で頻繁な地域間移動を余儀なくされるケースが少なくなかった。その場合、持続的な人間関係

を築くのはきわめてむずかしくなり、場合によっては人間関係を築くことそのものをあきらめるといった事態も生じていた。このように持続的な人間関係が困難な状況下ではエスニシティをめぐる葛藤さえも生じにくく、むしろ移動にともなう学業継続上の困難、すなわち継続性の喪失が切実な問題として経験されることになる。

だが、こうして生じた「欠落/喪失」の経験に対するその後の語り直しのありようが、将来の職業志向の形成と深く関連するというのが本研究のもう一つの知見である。一方では継続性を失うことで経験の断片化を強いられる状況にありながらも自らの内に持続するものへの気づきとして、他方では移動という行為に対する意味の読み換えによる移動への適応力の自覚として語り直しがなされた。頻繁な移動による学業の中断や進学への断念にもかかわらず、学びを価値あるものとみなす態度が自らの内に形成・維持されていることの気づきは、そのような態度の形成に他者からの働きかけが深くかかわっていることへの認識を同時にもたらしていた。そのような働きかけが偶然ではなく、外国人であるという必然性においてなされる必要があると認識され、また、第二世代ゆえに可能な学びの支え方があると実感される時、世代媒介型の職業志向が生みだされていた。他方で、移動する生活が複数言語の獲得や普遍性を有する技能の習得に結びつき、どこにいても「なんとかやっていける」という実感を生むとき、継続性の喪失の経験は、移動への適応力の獲得過程として語り直される。移動への適応力は、複数国を同時に見据えた空間媒介型の職業志向の基礎となっていた。

(4)本研究全体を通じて、ブラジル人青年にとって、越境移動にともなう困難は移行過程においてかならずしも「障壁」であり続けるわけではなく、自らの人生経歴に位置づけ直す機会が与えられれば、逆に自立を支える貴重な資源にもなりうるということが明らかになった。越境移動により生じる困難は固定的なものではなく、つねに語り直しとそれによる資源化にひらかれているのだ。

では、そのような語り直しを可能にする場をどのように構想しうるだろうか。本研究の成果をふまえて注目したいのは、日本の学校と外国人学校が協働関係を築くことにより形成される新たな場の可能性である。乾が述べるように、「移行過程の多様化・個人化の進行は、否応なしに一人ひとりの若者の状況の多様性に目を向けさせる」(乾 2010, p.277)。移行過程に国家間の移動が織り込まれる場合、そうした多様性はなおさら際立つものとなるだろう。本研究におけるブラジル人青年たちもたしかにこうした現実を体現してはいた。しかし、かれらはただ孤独に立ちすくんでいたわけではない。それぞれの出会いやつながりといった「共同性」(乾 2010)

に支えられ、経験の語り直しをおこないながら困難を切り抜けようと奮闘していた。こうした事例が示唆するのは、移行の多様化・個人化の現状に翻弄されるのではなく、かれらの自立を支える共同性の多様なありようを理解し、それが創出される場を支援することの重要性である。そうした観点からすれば、すでにそのような場として重要な機能を果たしている外国人学校の法制度上、公正な位置づけや財政支援等はもちろんのこと、日本の学校が外国人学校とつながることによって立ち現れる場、そしてそこで創出される共同性を支援し、活かすことが求められよう。

M・L・プラットは「まったく異なる文化が出会い、衝突し、格闘する社会空間」を「接触領域」と呼んだ(Pratt 2008, pp.7-8)。プラット自身は「植民地的遭遇の空間」の特徴を描くためにこの用語を用いているが、そこでなされる以下の指摘はより広い文脈においても有効であろう。すなわち、文化間の接触を「しばしば支配と従属のあいだの非対称な関係性のもとで生じる」ものとしてとらえる一方で、権力関係のもとで生じる「相互作用的・即興的次元」を重視することにより、支配者の視点で語られたストーリーにおいては無視・抑圧されてきた主体構築のありようを理解できるということである。

いま日本の学校に求められるのは「接触領域」としての自らの可能性を自覚的に拡張していくことである。外国人学校に自らをひらくことは日本の学校にかつて経験したことのない対立や葛藤をもたらすかもしれない。だが、そうした対立や葛藤は既存の関係性を問い直し硬直化した学校文化を組み替えていくための、すなわち多様性に満ちた社会を青少年が生き抜く力を育成しうる場へと学校を変革するための大きなチャンスでもある。広田は「紛争が起こることで、権限の適切な分配のラインや人権への配慮の妥当な範囲が、暫定的に線引きされ直していく」(広田 2009, p.224)と述べるが、外国人学校に自らをひらくことで生じる対立や葛藤は日本の学校や教育システムがデモクラシーに不可欠とされる「自己修正力」(渡辺 2010)を鍛え上げていくための貴重な契機なのである。対立や葛藤に踏みとどまりそれを乗り越える実践を外国人学校の関係者ととともに模索すること。空間的にも時間的にも多様なかたちで展開しうる「ルート」に公正に対応しうる教育環境を構想するには、自らが自明視する「ルート」の問い直しがなによりも求められる。

<引用文献>

- 乾幹夫、学校から仕事への変容と若者たち、青木書店、2010
- 広田照幸、社会変動と「教育における自由」、広田照幸編、自由への問い5 教育、岩波書店、2009、203-226
- 児島明、ニューカマーの子どもと学校文

化 日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ、勤草書房、2006
 児島明、在日ブラジル人の若者の進路選択過程、和光大学現代人間学部紀要、第1号、2008、55-72
 児島明、国境を越える移動と進路形成、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)第7巻、第2号、2010、253-283
 児島明、海外就労と自己構築、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)第8巻、第2号、2011、47-63
 宮島喬・太田晴雄編、外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題、東京大学出版会、2005
 小内透編、在日ブラジル人の教育と保育 群馬県太田・大泉地区を事例として、明石書店、2003
 太田晴雄、ニューカマーの子どもと日本の学校、国際書院、2000
 Pratt, M.L., *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge, 2008
 佐久間孝正、外国人の子どもへの不就学 異文化に開かれた教育とは、勤草書房、2006
 志水宏吉・清水睦美編、ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって、明石書店、2001
 清水睦美、ニューカマーの子どもたち 学校と家族の間の日常世界、勤草書房、2006
 清水睦美・児島明編、外国人生徒のためのカリキュラム 学校文化の変革の可能性を探る、嵯峨野書院、2006
 渡辺靖、アメリカン・デモクラシーの逆襲、岩波書店、2010

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

児島明、ニューカマーは差異をどう生きるか? あるブラジル人青年の学校段階間移行の経験に注目して、地域教育学研究、査読無、8巻、1号、2016、pp.41-47.
児島明、在日ブラジル人青年の学び直し 通信教育受講生の生活史分析から、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要) 査読無、第11巻、第2号、2014、pp.57-88.

〔学会発表〕(計1件)

児島明、在日ブラジル人青年の学び直し 通信教育受講生の生活史分析から、日本教育社会学会第66回大会、2014年9月13日、松山大学(愛媛県松山市)

〔図書〕(計3件)

児島明 他、岩波書店、岩波講座 教育 変革への展望 2 社会のなかの教育、2016、

pp.201-228.

児島明 他、明石書店、文化接触における場としてのダイナミズム、2016、pp.50-64.

児島明 他、名古屋大学出版会、教育と学びの原理 変動する社会と向き合うために、2015、pp.154-166.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

児島 明 (KOJIMA, Akira)
 鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：90366956

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()